

高齢者問題に共通する精神医療の

「人間であることの否定」「権利というものの否定」

修士課程医療福祉経営専攻

田中 知世子

大熊一夫氏の『ルポ・精神病棟』を拝読して30年、このような機会で大熊氏にお会いできたことが、先ずは感動。

あの「ルポ精神病棟」を読んだとき、まさにそのような精神病棟に勤務し、自分の中の悪魔に出会うような気がした。

抑制も抑制帯をしたまま「ケンケン」で移動している男性を横目で見ながら勤務した。ラクビー選手だったという屈強な男性は、四肢ベッド抑制され、鉄のベッドごと転がった。

トイレの中で念仏を唱える育児ノイローゼの女性。薬物中毒で拘束帯をつけた男性。人間が壊れるとはこういうことなのかと思った。

話を聞くと特別な人たちではなかった。

心がガラスのようだった。そして、誰もが病まないとは言い切れなかった。

ある夜勤の日、ナースステーションで勤務していたら当直の精神科医が「これを読んでみたら」と「ルポ精神病棟」の文庫本を貸して

くれた。旋律が走る。

そのときは知らなかったが、その裏で、医師会会長として絶大なる権力をふるっていた武見太郎氏が「牧畜業」などと言っていたとは驚きだ。異論を訴えるものはいなかったのだろうか。

権力の恐ろしさを思う。

少なくとも医師という立場からの発言とは思えない。

二つの否定「人間であることの否定」「権利というものの否定」、「存在を無にする場所を作る」など、今の高齢者問題にも共通するものがある。姥捨て山、臭いものに蓋をするなどこのような考え方は古くからある。

トリエステの地域精神保険サービスのような「精神病院をなくす」という世の中の流れは期待できるのだろうか。事件があると、「精神疾患であった」「病歴があった」「通院履歴がある」とメディアは伝える。その時世間は「やはりな。」という感情に傾く。

北海道の「ペてるの家」のような当事者研究プログラムは少しずつ伝染しているという。

そのような小さな活動が積み重ねられることによって二つの権利を否定しない精神科医療が静かに広がる事が、日本流かも知れない。